

「底が突き抜けた」時代の歩き方 592

生者は死者とコミュニケーションできるか

映画『シックスセンス』は、主人公の少年に死者の姿が見える特殊能力が備わっていないと成り立たない物語である。少年に死者が見えることによって、死者である精神科医や少女が少年の前に現れて物語が始まっていった。前号でも述べたように、生者には死者を感じることができても、死者が見えるということは起こりえない。映画だからこそ、死者が感じとれるのを死者が見えるという設定にしたのだと思われる。だが本当に、生者には死者が感じとれるのだろうか。極く稀にであれ、少年のように死者が感じとれる生者はいるのだろうか。そのことが一旦気になりだすと、映画の中で精神科医がそうであるように、死者が生者とほとんど変わらぬ格好で最初から最後まで出づっぱりであったことが気になってくる。生者の世界と死者の世界の隔絶がほとんど感じられず、生者の隣に死者が並んでいるかのような身近さとして映しだされているのだ。

少年に見える生者のような身近な感じの死者は精神科医一人で、他はすべて首吊り死体であったり、頭から血を流しているような不気味な死者であったりするから、生者と死者が自由に交感できる雰囲気には満ちていないわけではない。それでも少年が気味悪さに耐えて死者の少女に向き合うと、少女から気味悪さはすっかり消え失せて、どこにでもいる普通の少女の表情で少年になにかを依頼している場面として映しだされる。死者もまた生者とコミュニケーションできる存在として設定されていることが、生者と死者の区別を非常に小さくしているのだ。生者と死者の区別が小さくなっているということは、生と死の境界が小さくなっているということの意味する。このことはこの映画の観客に死者への親近感を募らせ、一旦命を失うと死者は二度と生者に戻ることはできないし、本当は生者と交感し合うこともできなくなるという感覚を鈍らせることにならないか。

5人の子供の内1人が、死んだ人は生き返ると考えているらしいと以前に報道されたことがあったが、映画『シックス・センス』に登場する死者は、自分が死んだことがわかっていなかったが故に、少年の前では生者のように振る舞うことによって、死んだ人も生き返る（かもしれない）という空気を醸成していることは否めなかった。少年と親密に接していた精神科医は最後の場面で自分がすでに死んでいることに気づいて、死者の世界に戻りもう二度と生者の世界には現れないことを匂わせていたが、だがこの場面はもし彼が死者であることに気づかなければ、いつまでも生者の世界にとどまって、少年のように死者が見える生者の前に現れつづけることになるのだろうかという憶測を窺わせていた。精神科医が生者の世界に二度と現れないという意志を固めるかどうかにかか

わらず、死者が生者の世界にとどまることができるというこの映画の考えそのものが、「死んだ人は生き返る」という誤解を生みだす源泉になっているように思われる。

日本女子大の中村博志教授（小児精神医学）が03年度に関東、中部、関西などの小中高生約1900人を対象にしたアンケート結果を、『週刊朝日』（05. 2. 4）が次のように掲載している。

《一度死んだ生き物が生き返ることがあると思うか？》という問いに、「生き返らない」（32. 9%）「わからない」（30. 9%）、「生き返る」（9. 2%）、「生き返ることもある」（12. 7%）

02年度の中学生約400人対象では、「生き返らない」（33. 3%）、「わからない」（17. 4%）、「生き返る」もしくは「生き返ることもある」（49. 3%）

この結果から中学生の半数、小中高校生の2割が「生き返る」もしくは「生き返ることもある」と思っていることが導きだされ、そう思う理由は次のようなものだ。

	小中高	中学生
「見たことがある」	（13. 7%	17%）
「教えてもらった」	（20. 1%	17%）
「何となく」	（48. 7%	66%）

01年に北海道から九州までの小中学生約2700人に行った、他の「死に関する」アンケートも掲載されている。

	低学年	高学年	中学生
「死んだ人を生き返らせることはできますか？」			
いいえ	81. 9%	77. 9%	67. 0%
わからない	12. 6%	17. 2%	20. 2%
はい	5. 6%	4. 9%	12. 8%

「飛行機は生きていますか？」			
いいえ	64. 9%	75. 1%	72. 7%
わからない	14. 7%	16. 2%	15. 5%
はい	20. 4%	8. 7%	11. 8%

「人形は生きていますか？」			
いいえ	57. 2%	62. 1%	59. 3%
わからない	14. 6%	18. 4%	20. 0%
はい	28. 2%	19. 4%	20. 7%

「テレビは生きていますか？」

いいえ	64.3%	76.7%	72.6%
わからない	11.9%	14.0%	14.7%
はい	23.7%	9.3%	12.7%

「ポケモンは生きていますか？」

いいえ	32.6%	57.8%	54.1%
わからない	13.3%	18.0%	18.7%
はい	54.1%	24.2%	27.2%

「死んだ人は動けますか？」

いいえ	79.2%	79.3%	74.9%
わからない	10.2%	13.8%	15.9%
はい	10.6%	6.9%	9.2%

「死んだ人は手を切ると痛いですか？」

いいえ	64.9%	64.1%	59.0%
わからない	21.3%	25.9%	30.3%
はい	13.8%	9.9%	10.7%

「死んだ人はおなかがすきますか？」

いいえ	65.8%	66.3%	57.7%
わからない	17.3%	24.0%	29.8%
はい	16.8%	9.7%	12.6%

「死んだ人は目をあけていれば、いろいろなものを見ることができますか？」

いいえ	71.6%	71.9%	57.9%
わからない	14.9%	21.1%	32.1%
はい	13.6%	6.9%	10.1%

「死んだ人はお経やお祈りを聞くことができますか？」

いいえ	32.1%	34.2%	31.5%
わからない	26.5%	30.3%	34.7%
はい	41.4%	35.5%	33.8%

「死後の世界はあると思いますか？」

いいえ	16.1%	12.9%	17.0%
わからない	24.0%	27.3%	27.5%
はい	59.9%	59.7%	55.6%

「死について今までに家族と話したことがありますか？」

いいえ	36.6%	43.3%	50.1%
わからない	23.6%	16.9%	17.1%
はい	39.8%	39.8%	32.8%

以上のアンケート結果に対して、先の中村教授は、「家庭も学校も『死』の話題をタブー視しすぎていて、子どもたちはきちんと『死』について話し合ったり身近な死を体験したことがないまま大きくなる。そこへメディアや本、うわさ話だけがどんどん入ってきて、『死』のイメージができてしまうのではないかと、分析する。したがって、「死ぬことが怖い」（48.1%）、「こわくない」（34.6%）という、03年度の小中高校のアンケート結果について、「子どもたちは『死』が理解できていないだけでなく、『死』との距離も近くなっている。生死の区別がつかないから、社会問題になっているような自殺やリストカットをする子たちが出る」とみる。

アンケート結果からすぐに浮かび上がるのは、「死者は生き返る」、飛行機や人形などの「無生物は生きている」、「死者は動けたり、おなかがすく」などと答える割合が、高学年よりも中学生のほうが多く、低学年は「死者は生き返らない」と8割以上が答えていることの疑問である。週刊誌の記事は、《欧米の発達心理学者の研究では、3歳児は死についてほとんどわからず、4歳では言葉の上で知っているだけ、5歳は初めて生きているものと死ぬものの区別ができるようになるが自分や身近な人が死ぬかもしれないとは考えられず、6歳は死を拒む気持ちが強まり、7歳で自分もいつか死ぬのではないかと考えはじめ、10歳でようやく成人の死生観に近づく」とされている。》と紹介し、この疑問を深めるが、「中学生になると一度理解した『死』の概念が揺らいでしまう傾向がある」と分析する旭川医大の岡田洋子教授（小児看護学）は、「日本では小学校入学あるいはその前に概念的な死生観はできていると思います。たぶん『知識レベル』が高いからでしょう。ただ問題は、それが単なる『知識』であって、発達とともに『感情』や『体験』をともなって確立されたものではないことです」と説明する。

低学年の間は「死」について知識レベルで理解していても、高学年になると感情や体験レベルで「死」についての理解が揺らいでくるとのことだ。高学年の健康児が「死者は生き返る」と思うようになるのに、病児はならなかったという90年の調査は、そのことを如実に物語っている。

「亡くなっていく友達を見ている病児と違い、健康児には年齢に応じた体験が積み重な

い。お墓参りにいっても特に話はしないから、お供えしたりお経を唱えたりする親をみて、死んだ人はおなかもすき、耳も聞こえると思ってしまう」（岡田教授）

「ゲームでリセットボタンを押すと生き返るのが問題だとよくいわれるが、子どもたちはそこまで単純ではないと思う。ただ内面世界に入りやすい高学年のころに、大人向けのテレビ番組やドラマ、映画などのリアルな映像をみて、『そうか死んでも終わりじゃないのか』となってしまうようです。本やマンガの影響もあると思いますが、映像のほうが一方的に入りやすい」（札幌市公立小学校、大野睦仁教諭）

映画『シックスセンス』も「そうか死んでも終わりじゃないのか」と思わせてしまう映像の部類に間違いなく入るが、記事はそんな映像の時代を裏付けるように、《確かにテレビ番組では「奇跡の生還」や「霊界」というテーマがよく取り上げられている。最近、映画でも、亡くなった母親が夫と息子のもとに6週間だけ戻ってくるというストーリーの「いま、会いにゆきます」や生き返りを描いた「黄泉がえり」が人気だ。》と記す。更に、死を考える授業に対して、「死が身近になると自殺に走るのでは？」とか「ショックを受けるのでは？」といった声も根強く、タブー視される風潮にも触れ、《中には「死は終わりではない」と宗教の信仰者から本が送られてきた先生もいた》そう、ただ、「高齢化、核家族化で子どもたちが死と触れる機会は減っている。大人たちがいま意識的に『死』の教育をしないと将来、大変な社会になる」ことが、先の教授たちによって共に力説されている。

作家の高橋源一郎は「ニッポンの小説 第三回」（『文学界』05・3）で、以上の同じアンケート結果に言及しながら、《きちんとした「感情」や「体験」をともなっていて得られた「知識」があれば、通常は、人は、人形やポケモンが実際には生きていないことや、死んだ人は決しておなかですいたりしないいろいろなものを見たりもできないことを知っているはずだ》などと、「死」について考えることはそれほど簡単ではないと主張する。おとなたちが《子どもたちに、人形は生きていないといった上で、ぬいぐるみに親しげに話しかけたり、死んだ人はおなかですいたりしないといったかと思うと、仏壇に饅頭や水を供えたりする》ことを、子どもはどう見ているのか。《おそらく、たいていの子どもは、親と一緒にあって、ぬいぐるみに、「可愛いね、ピーター」と話しかけたり、仏壇の祖父母の写真に向かって、手を合わせたりするのです。内心では、人形は生きてなどいないとか、死んだ人が飲んだり食べたりするわけがない、と思いながら。》

人々がもし本当に死者が食べられないことや、お経やお祈りを聞いたりできないと思っているのであれば、どうして仏壇に饅頭を供え、お経やお祈りを捧げたりするのか。作家は、《自分の、その行いについて、「ぼくはもちろん、死んだ人が甦るとも、死んだ人がなにかの意識を持って存在しているとも思わない、では、なぜ祈るのか。死んだ人に祈りを捧げることで、なんとなく死んだ人への負い目が減るような気がするからだ、ということは、死んだ人と関係なくこちらの事情で祈っているように思われてしまうか

もしれないが、そういうわけじゃない、そこのところは上手く説明できないけれど」というようなことをぼんやり考えたりする》。

死者に食べられない饅頭を仏壇に供えたり、届かないお経を唱えるのは、たぶん生者は死者の世界との関係を断ち切りたくないし、断ち切れないうちにいるからではないか。なぜそう思うかといえば、死がなければ生がない、つまり、生死は一体化した関係にあることがなんとなくわかっているからであり、我々の祖先の誰もが死者の世界へと旅立っていったように、我々も必ず死んでいく運命にあることを感じ取っているからだ。いま生きている我々の次に赴く先が死の世界であるなら、生の世界と死の世界を切り離すことがどうしてできるだろう。「生き返り」を信じるかどうかのアンケートがあっても、「人は死ぬか」を問うアンケートがないのは、そんなアンケートが成り立たないほどに、人が死ぬことは当然の共通前提となっているからであり、「生き返り」のアンケート自体が「死」を前提とせずには成り立たないのである。

《わたしの考えでは「死」や「死者」にまつわる、そういう事情、つまり、なにもかも曖昧なまま放置しておく、といった現在の状態は、文学や小説にとって、たいへん都合がいい》と作家が言うとき、その都合のよさの一つとして、《わたしの考えでは、人は生きている時しか、発言でき》ないにもかかわらず、小説や詩の中にさまざまな死者が登場して、さまざま言葉を発し、しかも、《ここには、死んだ人間が、なにかをいおうとしているように思わせるなにかが存在してい》る、と受けとめられることに疑問を感じている。詩や小説の中で「死者の痛み」について語りかけるのは、「死んだ人は手を切ると痛いですか？」という小・中学生への質問で、彼らの3割か4割ほどが「死者の傷口は痛むんじゃないだろうか、少なくともその可能性はありそうだ」と考えることと同じであり、《死者というものは、生きている人間とは、もう少し、いや、徹底して異なった存在であるべきではないか》という疑問なのだ。

小学校入学以前の、5歳か6歳の頃の子どもに「死」に対する恐怖が芽生えるのは、《生きとし生けるものはみな死す》という死生観をもち、死後の自分は《完全に無になって消滅すると考え》ようになるからである。消滅した自分について考えることは誰にとっても想像できないことであつたので、恐怖を募らせる以外になかったのだ。《つまり、5歳か6歳のわたしは、直観的に、「死者」を内側から描写することは不可能だ》し、《「死者」のことなど理解できない、「死者」とはコミュニケーションできない、と考えていた》のに、文学や小説を読むようになって、世間とか社会に晒されるようになって、《彼らは（文学や小説や世間や社会は）、わたしに、「死者」とはコミュニケーションできるのだと説得しはじめました》。要するに、文学や小説や世間や社会の中で、《死者は、そのままの形で、あるいは幽霊や亡霊というものに変形して、雄弁に彼らの所信を語ったりしてい》るということだ。

しかし、両親が亡くなって、作家は《実際に、「死者」をしみじみ見つめることがで

きた》ときに考えていたことをこう記す。

《わたしは、死んだ父や母の傍らに一晩中いて、その顔を眺め、その体に触れたりしながら、目の前にあるこれはいったい何だろう、と考えていました。ここにある、この青ざめた物体は、確かに、父や母に似ているが、どう考えても別物ではないだろうか。もし、この不思議な物体に、仮に「内面」のようなものがあるとしても、そこには、絶対に、我々が使っているような言葉は存在していないに違いない。「彼ら」に、もしなにか「考える」とか「感じる」というような能力があるとしても、それは、我々のそれとは、まったく異なったものであるに違いない。》

作家はここで、もはや生者と死者は同じ言葉でつながっていない、そのことが死という断絶であるのに、《死者というものが、ある意味で、たいへん書きやすい存在だから》という理由で、死者になにかを語らせようとするのは不当ではないか、と主張しているのだ。《死者は死んでいて（妙な言い方ですが）、それ以上、自分自身についても、それ以外のなにについても、新しいことをなにも付け加えない》存在であるが故に、《我々が、死者について、なにかを書いたとしても、死者は絶対に抗議したりしない》し、反論もしない。抗議も反論もしない死者を出しに使って、つくりだされる文学や小説とはなにか。そのことを問わない文学や小説とはなにか。死者の抗議や反論の成立しない場所で生みだされる文学や小説は、もはや文学や小説であることに値しないのではないか。

《ともあれ、我々は、長い間ずっと、「死者」にしゃべらせたり、「死者」の代わりにしゃべってきました。なぜなら、それは、たいへん都合のいいことだったからです。

作家たちは、「死者」の「遺言執行人」として、たいへん羽振りのいい暮らしをしてきました。それを続けたとして、いったい、どんな不都合があるというのでしょうか。

作家たちも、ほんとうは「死者」の言葉など聞いたことがなく、なんとなく聞こえたような気がただけだったのかもしれませんが。あるいは、作家たちの多くは、「死者」の言葉など、もともと聞こえず、要するに、象徴的かつ抽象的な意味で、「死者」の言葉を聞き取ったのだ、と主張していただけないのかもしれませんが。

そして、その結果はというと、「そんな昔のことは自分には関係ない、だいたい、自分がなにかをしたわけでもないのに、責任などあるはずもない」という若者を産み出したのです。あるいは、「死んだ人はお経やお祈りを聞くことができますか？」と訊ねられて、「はい」「わからない」「いいえ」と回答が、等しく、三つに分かれてしまうような子どもたちを。》

「死者」の言葉など本当に聞いたこともないし、知らない筈なのに、あたかも自分だけは聞き取ってきたかのように、《「死者」にしゃべらせたり、「死者」の代わりにしゃべることは、「実体のない空疎な言葉」に等しいのではないか。生者としての自分が語っているにすぎないのに、「死者」を登場させて語らせるような文学や小説は、「実体のない空疎な言葉」に敷き詰められているだけではないか。官僚が作成したペーパーを棒読

みする首相の言葉を指して、行動と切り離された「実体のない空疎な言葉」と大半の人々はみなすだろうけれども、では作家たちは、「実体のない空疎な言葉」からどれほど免れているというのか。そう問うているのだ。

《「お経」や「お祈り」が「死者」に向かって発せられる言葉だというなら、それは、要するに、「死者」とコミュニケーションするために用いられる言葉だという意味のはずです。では、我々は「死者」とコミュニケーションできる、とほんとうに信じているのでしょうか。作家や詩人たちが、それ以外のたくさんの人たちが、「死者」とコミュニケーションできると主張しているのを聞いて、なんとなく、そうなんだろうと思っているだけではないのでしょうか。そもそも、「死者」とは何でしょうか。そして、それは、我々と、生きている人間とコミュニケーションできる存在なのではないでしょうか。》

生者はもし本当に「死者」とコミュニケーションできると信じるなら、当然のことながら、どのように「死者」とコミュニケーションできているかが明示されなくてはならないし、同時に「死者」の考えが生者にとってどれほど不都合であろうとも、取り入れられなくてはならないだろう。そうでなければ、「死者」とコミュニケーションできるなどとはとてもいえない。生者である我々はこれまで本当に「死者」の考えを取り入れながら、「人類の行き先」を決定してきただろうか。特攻隊の若者を含む60数年前の戦争の膨大な「死者」たちの意見を聞き取りながら、我々は日本の戦後を歩んできた、堂々と胸を張って言えるのだろうか。「死者」は片隅に置いて、我々は生者の都合だけで戦後の繁栄とやらをめざしてきただけではなかったか。あまりにも「死者」をないがしろにしてきた負い目に駆られて、供養のかたちで「死者」とのコミュニケーションを願っている振りをしているだけではないのか。

生者は「死者」の考えを取り入れなかつただけではない。「死者」の言葉を持ち出すときは必ず、生者の都合を促進するために利用してきただけのことなのだ。本当のことをいえば、もはや生者である我々は「死者」とコミュニケーションできる能力も感覚もすっかり失ってしまって、生者のことしか考えられなくなってしまった、とはっきりと言明すべきなのである。生者の都合のために「死者」を利用しないことが、「死者」に対する最大限の供養になるだろう。太古の昔の人々には確かに、「死者」と共に暮らしているという感覚が見受けられたし、その証が身近な至る処に見出された。おそらくシャーマンを媒介して「死者」の考えが取り入れられて、生者の都合だけで世界が成り立っていないことを立証するかのように、生者の生活の進歩に比重が置かれてこなかった。生者の都合と「死者」の意向とを天秤に掛けざるをえなくなったとき、彼らは「死者」の意向をたえず優先してきたのだと思われる。

なにも太古の昔の人々だけではなく、そのような「死者」と共存する生活様式を頑なに選び取ってきた、白人に征圧される前のアメリカ大陸のインディアンや、大和朝廷に屈服させられる前のアイヌの人々などは、生者の文明に背を向けてまでも「死者」や動

物たちとコミュニケーションしようとする生活スタイルを守り抜いてきた。彼らはおそらく自分たちが「死者」とコミュニケーションできることを、そのように生活してきていることを全く疑ってこなかったようにみえる。「死者」が自分たちと共に生きているという感覚に包みこまれていたが、だからといって彼らが本当に「死者」とコミュニケーションできていることにはならない、ともちろん疑問を呈することはできる。だが我々がいま、「死者」とコミュニケーションできるかと問うとき、「死者」が自分たちと共に生きているという感覚をすっかり失くしてしまっているなかでの問いであることを忘れてはならない。

どのような状態になったときに、生者は「死者」とコミュニケーションできたと判断されるのか。おそらく「死者」ともコミュニケーションが成り立つためには、太古の昔の人々やインディアン、アイヌの人々の生活様式がそうであったように、「死者」と共存している感覚にまず包みこまれなくてはならない。その感覚抜きには「死者」は生者のもとを訪れようがないだろう。いいかえると、「死者」が生者のもとにやってくるよりも、なにもしなければ遠ざかるようとする「死者」を生者は繋ぎ止めておく努力をたえずしなくてはならない。次に「死者」と共存する感覚に包みこまれるなかで、「死者」は生者の都合にブレーキーをかける勢力として登場しなければならない。「死者」はもはや生者の価値観に収まらないところへと旅立っているからだ。生者は自分たちの都合を超える場所に「死者」を据えることによって、生活の中での共存を果たそうとしなければならない。

人類の進歩とはいうまでもなく生者にとっての進歩にほかならない。したがって、進歩とはいかに「死者」の意向に耳を傾けなくなつて、生者の都合のみで歩を進めてきたか、という意味での進歩でもある。あるいは、生者を超越する場所から引きずりだして、いかに「死者」を生者の世界の中に取りこもうとしてきたかの進歩でもあるのだ。我々が「死者」とコミュニケーションできるか、という問いを立てるとき、それ故に、生者の世界の中に取り込まれてしまった「死者」とのコミュニケーションについて考えているように思われてならない。つまり、どこまでいっても「死者」のかたちをした生者にほかならないのだ。「死者」とは生者の手の届かないところに赴いた存在であり、生者にとっての「死」とはそういうことであることを踏まえ、生者と「死者」とはけっして地続きにはないことを知るなら、生者の世界に取り込めないところにもう一度「死者」を据えた上で、「死者」とのコミュニケーションについて考えなくてはならないだろう。

そうすると、《わたしには「死者」というものが、よくわかりません。》と作家が言うように、生者にとって「わからない」ところに「死者」置くところから、「死者」について考えなくてはならないのだ。《少なくとも言葉の上では、わたしは、「死者」というものを、よく知っています。とはいっても、「死者」の言葉と称されるものを読んでみると、実際は、生前の「死者」の言葉だったりするわけで、要するに、それは生者の言葉にすぎないのです。》という言いかたで、作家はどうして「死者」というものが「わからない」のに、生前の「死者」の言葉をもちだして、あたかも「死者」の言葉がわか

ったかのような振りをするのかと問うているのだ。《知らないことは知らないと正直に告白すればいい》し、知っていることだけをなぜしゃべろうとしないのか。おそらくそれは、作家たちが文学や小説というものは、自分たちにとっての「わからない」世界について語るものだという考えに囚われている所為であるかもしれない。

《多くの作家は、自信たっぷりに、いろいろなことを説明します。その中の、もっとも重要なものの一つが、「死者」であることは、もう書きました。

彼らは、いったん「死者」になった存在を、小説や詩の中に登場させ、なにか、現実や現在といったものに影響を及ぼすような存在として描くことによって、「死者」というものを、生きている我々に役立つなにかにしようとするのです。》

しかし、本当は「わからない」ところにいる「死者」をわかったかのように描き、「死者」の言葉を生者に伝えさせようとすることは、《政治の言葉》に等しいのではないか、《政治家と同じ言葉づかいを選ぶしかない》ようになってしまってるのではないか。そう言おうとしているのだ。文学や小説の言葉であれば、どうしても「死者」に触れなければならない場面であっても、《「死者」を描かぬようにしようとする努力》なくてはならない。なぜなら、「死者」とは本質的に「わからない」存在であるから、言葉で描くことによってわかったつもりになってはならないからだ。作家は、「死者」とはなにか、を問いかけながら、「死者」を描きたがる文学や小説を通して、文学や小説とはなにか、を問いかけているのである。

「死」について考えることが成り立たないのは、誰も「死」を体験することができないからだ。「死」を体験するためには、「死」の体験後に生の側に戻ってこなければならぬ。だがそれは不可能だから、「死」について考えることも、体験することも誰にもできないのである。にもかかわらず、生きている我々は誰でもそのような「死」を免れることはできないし、そのことを知らない者はいない。だから「死」は恐いのである。「死」がどのようなものであるかがわからないからこそ、そのようなわからない「死」の世界へやがて確実に連れ去られていくことに恐怖せざるをえないのだ。「わからない」世界は恐怖心と共に好奇心を募らせるけれども、「わからない」ままに入りこんだまま、二度と戻ってこれなくなることを想像してみることが、だがどうしても想像できないことが、やはり恐怖心を増幅してやまないのである。

命がけという言葉がよく使われるけれども、それは生きることを前提としている。「死」は生を前提としていないことによって、文字通り一回限りの正真正銘の命がけといわざるをえない。「死」とはなにか、を問うことはできなくても、「死」はいつから生まれるようになったのか、は学問的には解明されている。04. 9. 27付産経掲載の特集記事によれば、約35億年前に原始生物が地球上に最初の生命体として誕生したとき、そこは「不死」の世界であった。DNAを収納しておく核を持たないバクテリアなどの「原核生物」は、細胞が分裂して増殖するが、時には環境によって無限に分裂して自らのク

ローンを生産する「不死」の存在なのである。ところが、十数億年前に細胞にDNAを収納する核を持ち、二つの細胞が接合（融合）する有性生殖で増える多細胞生物の「真核生物」が登場することによって、「性」が生みだされると共に「死」を有することになった。

生命の進化をDNAの分析を通じて研究する「分子進化学」が専門の宮田隆京大名誉教授によれば、「二つの個体が接合して遺伝子情報を交換する有性生殖によって、生物は親とは異なった遺伝子を持つ次世代の生命を生むようになった。と同時に古い遺伝子を個体ごと消去する術を獲得した」。無性生殖から有性生殖への変換（進化）はいうまでもなく、生物が生き延びていく環境のなかで有利であったからだ。「異なる遺伝子を混ぜ合わせる多細胞生物は有害な細菌の侵入や環境の変化などに対抗しやすく、遺伝子を次世代へ伝えるという側面で有利でした。遺伝子の伝達をより確かに行うという観点からみれば、『死』は進化の過程で必然的に生まれたといえる。更に「死」によって、新たに生まれた遺伝子の組み合わせがチェックされ、欠陥のある個体を取り除かれる点でも有効なのである。

細胞の寿命を統御するというテロメア研究の先駆者である石川冬木教授は、「細胞の老化と死」の観点から、「個々の細胞は生きることだけを至上の目的としているわけではない」ことを明らかにする。《高等生物の皮膚などの体細胞は数十回分裂するが、分裂するごとにDNAの端にあるテロメアが短くなる。そして、一定以上に短くなると、その細胞は分裂を停止し、寿命を終える。このためテロメアは「命の回数券」とも呼ばれる》が、《このテロメアが短くなるのを防ぐ物質が細胞内にある。テロメラゼという酵素で、この酵素が働くと、テロメアが継ぎ足され、分裂回数を伸ばすことができる。細胞が「不死」を手に入れることができるのだ。／ところが、これが必ずしも個体にとって良いこととは限らない。》なぜなら、「テロメアの補修機能を維持できる理屈だが、『不死』はがんの前段階とも考えられる。細胞があまり長い寿命を持つと皮肉にも、がんになりやすくなる」（石川教授）からだ。

寿命を迎える前に、自殺するアポトーシスという細胞は、遺伝子によって制御されている細胞を計画的に死滅させる。《古い細胞や異常を起こした細胞が死に、それによって新しい細胞が生まれることを促し、循環を保つ》のだ。胎児の指にあるカエルのような水かきが、成長するにつれて自然と消えるのもアポトーシスの所為であり、《アポトーシスを起こした細胞は小さくなり分解され、整然と組織に吸収され消滅する。》アポトーシスによって仕方なく死んでいくのではなく、必要に応じて自主的に死んでいくのである。石川教授は、「細胞死は起こらないと困るし、起こり過ぎても困る。生命はその巧妙なバランスの上で成り立っている」と言い、生と死は対立概念ではなく、《二つが一体となって生命がある》と同時に、生命の「死」は突然起こるものではなく、生の中で死が不断に引き起こされていく、いわば死が生を維持する「プロセスとしての死」の観点をも提出していると考えられる。

性のはじまって死もはじまったという言い方は本当は、性のはじまりのなかで生を受けたものは、性を喪失することによって死を迎えていく、ということであるだろう。ところで、性とはなにか。飢餓に見舞われた細胞が生き延びるために合体することなのだ、ということが、団まりな『性のお話をしましょう』の中村桂子の書評（05．2．20付毎日）のなかで紹介されている。

《しかもこの話、性の始まりは飢えだと最初から意表をつく。お話なので、始まりは当然、昔々……それも20億年ほど昔にさかのぼる。それまで元気に増えていたバクテリアなどの仲間（原核細胞）と違って、私たちの身体をつくっているのと同じ細胞（真核細胞）が誕生した。真核細胞の中に光合成で養分をつくるものが生れ、廃棄物として毒性の高い酸素が生じたので、大事なDNAをできるだけ毒に触れさせないために細胞を大きくし、中に奥の院（核）を作ってそこにDNAをしまいこんだのが真核細胞である。大きくとはどの程度かと言えば1000倍である。

図体が大きくなると、それを支えるしくみが面倒になる。小さな真核細胞の時は、周囲にある物質を何でも食べた。イオウでも鉄でも……近年ではプラスチックを食べるものまで見つかっている。一方真核細胞はエネルギー効率のよい糖分だけしか利用できない。確かに効率はよくなったが生きていける幅は狭くもろくなってしまったわけだ。豊かな栄養分のないところでは生きていけない。これがわれわれの体をつくっている細胞の実態なのである。

実際、クラミドモナスという真核細胞一個で生きている藻を培養し、培養液からちっ素を除く実験をしたら、数時間のうちに全細胞が二つずつ合体してしまった。ちっ素は、タンパク質の素。それがなくて体が作れず死ぬしかないという危機に追い込まれた細胞は、とりあえず近くにある仲間と合体して、お互いが持っているものを融通し合って生きのびようとしたのだと、著者は解説する。

クラミドモナスは、染色体を一セットしか持っておらず、われわれで言えば、精子や卵と同じ。これが合体すると染色体を二セット持つわれわれの体の細胞と同じになる。つまり、飢餓状態に置かれたクラミドモナスが合体して染色体を二セット持つ細胞になったのは、ちょうど受精したのと同じことになるわけである。》

評者はこう辿ってきながら、性の誕生という生物界での大事件が起きるためには、《DNAのどこにどんな変異が起きなければいけないか。（中略）たまにしか起こらない変異がどのように積み重なったら、今まで性などなしに分裂で増えていた細胞が有性生殖をするようになるか。》細胞が《飢餓に見舞われて、死んでたまるかと合体してみたら、なかなか具合がよかったのよと言われると、なるほどと思えてくる》と感想を述べ、そこには《細胞が生きることのための工夫》を追求しているのがすべてであり、《そこで、有性生殖は、細胞が生きるための遺伝子の若返りと修復のため》、という説が導きだされる。

2007年7月29日記